

資料

幼児の野菜収穫における幼稚園教諭の援助

－ A 幼稚園の「ジャガイモ掘り」の実践から－

古郡 曜子・美馬 正和

(2014年12月26日受稿)

抄録： 幼稚園・保育所における食育の一環としての栽培活動において、その効果や実践が報告されている。本研究では幼稚園での収穫に関する幼稚園教諭援助の考えと幼児への教育実践を報告したい。方法は、幼稚園での栽培担当教諭への半構造化インタビューを行い、幼稚園での収穫「ジャガイモ掘り」での幼稚園教諭と園児とのかかわりの様子を観察、ビデオ撮影して、それぞれを分析した。

幼稚園教諭は収穫方法を丁寧に指導し、子ども全員に「できた」という喜びと楽しさを感じることができるようにしていた。その喜びと楽しさは達成感につながるものであり、収穫の目的が収穫時の「達成感を感じさせる」ことと推察された。

この達成感によって、子ども自身は栽培した野菜を食べる楽しさをより多く感じることができる。幼児期の栽培・収穫の目的は子どもの経験の多少にかかわらず、子ども自身が喜びを感じ、食べる楽しさにつながるようにすることである。収穫における幼稚園教諭の援助の実際から、栽培活動の目的が「達成感を持たせる」から「栽培した野菜を食べる楽しさにつなげること」であることが分かった。

I. はじめに

幼稚園・保育所における食育は幼稚園教育要領と保育所保育指針に明記されており、幼児への教育・保育で重要な位置づけがなされている。その一方法としての栽培活動の研究には次のようなものがある。

外山氏らは「保育園の作物栽培実践に基づく食物の生産過程に関する学び」¹⁾において、「幼児といえども、園での経験に基づき、作物の生産・流通過程についてある種の理解を形成できるのである。」と述べている。

また、木田氏らは「幼稚園にける野菜栽培活動の状況とその食育効果－北海道某市での調査－」²⁾において「85%以上の幼稚園での野菜栽培活動で育てた野菜を好きな子どもや食べ物に興味・関心を示す子どもが増加していた」と報告している。

筆者はこれまでの野菜栽培活動の研究で、次のことを見出すことができた。幼稚園教諭へのインタビューでは、栽培活動と「好き嫌いの改善」、 「野菜の栽培」、 「子どもの調理」、 「保護者への思い」、 「あそびと食欲」の関係性が見出された³⁾。さらに幼稚園における栽培活動の環境設定での課題⁴⁾を見出し、その解決方法として「保育本来の目的を食育として特化せずに位置づけることで、職員が通常保育の一部として計画実行しやすく、地域性を生かしたボランティア協力者によって幼児教育者の負担という課題を解消できる」⁵⁾ことが分かった。

幼児教育の根幹には環境設定とともに、幼稚園教諭の幼児への関わり方がある。そこで、本研究では幼稚園での収穫に関する幼稚園教諭援助の考えと幼児への教育実践を報告したい。

II. 方法

幼稚園で栽培活動を担当している教諭へ半構造化インタビューを行い、エピソード法^{6) 7)}を用いて分析した。インタビュー項目は「収穫における子どもへの援助方法」と「収穫での子どもへの思い」とした。さらに幼稚園での収穫「ジャガイモ掘り」での幼稚園教諭2名と園児とのかかわりの様子を観察、ビデオ撮影を行い、分析した。

対象はA幼稚園教諭1名で、インタビューは2014年8月1日に行い、「ジャガイモ掘り」はA幼稚園2クラス教諭2名で、対象園児はaクラス23名・bクラス22名、2014年8月25日に行なった。活動時間はaクラス・bクラスともそれぞれ約20分であった。

A幼稚園での栽培作物は3・4歳児ではジャガイモを作り、5歳児は園児たちが作りたい希望の野菜を多く作ることにしている。本研究では、栽培活動経験の少ないと思われる3・4歳のジャガイモの収穫場面に着目した。

なお、本研究では「援助」は子ども自身の成長・発達をうながすことを重視した保育とし、「指導」は教育的配慮（教えることを主体）を重視した保育とする。

III. 結果

1 収穫における教育目的

幼稚園教諭のインタビュー内容は次のようなものであった。

まず、収穫の活動の目的について次のことが話された。

「意味のある活動です。毎日遊ぶ合間に水をあげて、普段買って食べているものがどういう風に出ているのか、一日では出来るわけじゃないし、雑草抜いて世話をしてやっと出来るということを感じてもらいたと思います。」、「自分のものが出来たという体験をしてほしいと思います」と述べ、子ども自身が世話をしてできたことを実感させたいという思いが述べられた。

雑草とりと水やりのエピソードとしては次の内容が得られた。

「二人の園児に雑草とりをがんばっていたから、こんなに大きくなったよねって話したら、次の日から、他のみんなが雑草を気にして抜くようになって、すごくいいきっかけになった」、「雑草とりは、朝・帰りの時間にやっていることなので、子どもたちはやっぱり遊びたい。そんな時間を割いて雑草をぬいていて、子どもの中にはよし今日は畑で終わらせようと『雑草抜いて水あげていい』ということがわかってきたことがあった。意欲をもってこうしたらいいと分かったのかと思います」と述べ、さらに、「もちろん、遊びたい気持ちもすごく分かるのですが、その中でも一回でも二回でも水やりと雑草ぬきをしてほしいです。一歩ずつ進んでほしいです」と、子どもの遊びたい気持ちとの葛藤の思いを述べていた。

また、次のような子どもの様子を見つめている。「毎日一生懸命に水をあげて、ずっと草を抜いている男の子がいて、その子はほぼ全てのいろいろな人（園児）の植えたものに水をあげてまわって、乾燥している土の色を見て、意識して水をあげているのです。雑草もいろんなところから抜いてがんばっている子がいるのです。」と子どものがんばる姿を見ていた。

さらに、収穫後の食べる場面での子どもの意欲を次のように話していた。

「育った野菜を食べたときに、嬉しそうです。キュウリがすごく人気で、大きいのが2本3本できた時です。漬物にし、一人2・3枚くらいしか食べられないのですが、子どもたちが『もっとないの』と言うのです。『あれ、こんなにみんな野菜好きなのか』と思いました。『野菜嫌いな人（園児）は、食べなくてもいいよ』とは言ったのですが、嫌いな子どもがチャレンジしました。『先生、やっぱりダメだ』と言っていた野菜嫌いな子どもが次に収穫した時に、また食べてチャレンジしてそれで、食べられることになったのです。そして、一つのテーブルにキュウリの皿があって、子どもたちが

ならんで順番に食べる・並ぶ・食べる・並ぶ・で、ずっと無くなるまで列が続くのです。そして、無くなると子どもは『もっと食べたかったな』って言うのです。」と話し、子どもの積極的な食べる場面を述べていた。

これは、野菜嫌いの子どものもそうでない子どもも栽培をしたことで楽しくおいしく食べたエピソードである。

以上のことから、次の栽培目的が見出された。

①子ども自身が自分で作った実感を持たせる。②栽培の過程を体験させる③遊び時間を減らして行う栽培活動を大切にしている、の3つであった。さらに、④自分以外の他の子どもの作物の世話をを行うことへの評価も高かった。

2 「ジャガイモ掘り」における教師の援助と園児の活動

本研究対象幼稚園でのジャガイモ掘りの作業工程は、a・bクラス共通であり、①幼稚園教諭が畝をおこす②乾いた茎を目安にジャガイモを手で掘り出す③ジャガイモをバケツに入れる④ジャガイモを皆で数える、の4段階であった。

幼稚園教諭の保育内容はa・bクラスとも次の3つに分類することができた。「収穫方法の指導」と「子どもへの協同・励まし」、「楽しさへの誘導」であった。それぞれを4つの段階順に幼稚園教諭の援助をまとめた。

なお、研究対象の幼稚園は「たてわり保育」で3～5歳児が1つのクラスで保育をすることが多く、「ジャガイモ掘り」も「たてわりクラス」で行っていた。

「収穫方法の指導」は次の援助があった。

① 「みなさんが植えた、イモがあります。イモが見やすいように、土を柔らかくするからね。見えるかもしれないよ、イモが」と言う。(畝をやわらかくする説明)

② 「お手手汚くてもがまんでできるかい?」、「じゃあ、先生が集まって、って言ったら集まれる?」と言う。「それでは、みなさま、今からイモを掘

る準備はいいですか?」と言う。(収穫の準備の誘導)

③ 移動をしながら右手を口元にもっていき「掘り始めていいですよ」と言う(収穫開始の指示)

④ 「大きいイモも、小さいイモも全部採って」と話す。(ジャガイモの大きさの指示)

⑤ 「それでは、イモ、おはようって出たら～」と言う。バケツの置いてあるところへ移動して、バケツが見えるように高く上げて「このオレンジのバケツに入れてください」と言う。

子どものひじに手を添えて、畝から移動させるよう「バケツにおイモさん入れてください」と言う。子どもたちが見せてくるイモを確認しながら、バケツにイモを入れるようバケツを指差す。(入れ物の指示)

⑥ 子どもの手首を掴んで、イモの茎へ誘導し、茎を握らせ、引き抜く準備をさせる。(茎の引き抜き指導)

⑦ 土の中に残っているイモを指差しながら「こっちも出てきたね」と言う。(ジャガイモへの着眼誘導)

⑧ 子どもと一緒にイモを掘り、周りにいる子どもたちに見せるように掘ったイモを少し上にあげて、「掘って、掘って」と言う。

しゃがみこみ、子どもたちと一緒にイモ掘りを行う。近くにいる子どもに声をかけるように「掘って、掘って、掘らないと、掘らないと」と言う。

子どもたちとイモを掘りながら、全体に聞こえるような大きさの声で「手が真っ黒になるまで掘って」、「もっともっと掘って、手、真っ黒にして」と言う。

子どもの行動を促すように少し大きめの声で「もっと掘って。もっと掘って、まだあるまだある」と言う。(収穫の誘導)

⑨ 子どもに移動する先を指でさして移動を促しながら「終わった人お引越ししてもらおうかな」と言う。

正面にいた子どもの移動を片手で促し、片方の手で移動した子がいた場所に、隣にいた子どもの

手を引いて移動させている。(子どもの場所の入れ替え)

⑩ 茎を引き抜いた2人の子どもの身体に触れ、子どもを向かわせたい方向に軽く押しながら「○○ちゃんやっていないかな」と言う。(していない子どもの誘導)

⑪ 立ち上がりながら子どもの腕を掴み移動させ、肩に手を置いてさらに移動させる。

しゃがんで、子どもたちに指をさしながら「○○ちゃん、やった?」と言う。(していない子どもの確認)

⑫ 幼稚園教諭は左隣にいる子どもの手を取り、イモの茎まで手をもっていき「じゃあ○○ちゃんと一緒に付き合ってくれる?」と言う。(消極的な子どもをできている子どもとの協力誘導)

⑬ 子どもたちに近寄りながら、子どもたちが抜いた茎を畑の奥に捨てる。子どもたちに視線を送りながら、右手を口元に近づけ「みんな引っ張った?」と言う。(全員参加の確認)

⑭ 畝の全体を子どもたちにみえるように手をさして動かしながら「じゃあこの列はバナナさん」と言う。(他のクラスの場所の確認)

⑮ 「最後に洗いましょうね。出てきたイモをバケツに運んでください」と言う(洗うことの指示)

⑯ イモを掘った子どもの腕を掴み立つことを促しながら「バケツにこれおいてきて、まだ引っ張っていないところある」と言う。(取り残し有無の確認)

⑰ 根についているイモを取るような動きをしながら「バラバラにしてバケツに入れてください」と言う。(ジャガイモ分散の指示)

⑱ イモが掘れていない一人の子どもの腕を掴んで畝に子どもと一緒に移動する「○○ちゃん、こっちにおいで」イモの埋まっている場所を指差し「ここやろう」と言う。さらに、子どもの肩に手をかけてしゃがんでイモを掘ることを促し「ありそう」と言う。

隣の子どもに視線を向けながら「次は○○ちゃんかな?」と言う。

立ち上がった子どもに視線を向けながら「やってない人どうぞ」と言う。

幼稚園教諭の正面に移動させてきた子どもの隣の子の移動を促しながら幼稚園教諭から数歩離れた場所に立っていた子どもに近づき、視線を子どもの高さに合わすように「まだやってないのは○○ちゃん?」と言う。

イモ掘りをしていない子どもがいると、イモが埋まっていそうな場所を指差しながら指示を出す。(消極的・躊躇している子どもの確認と誘導)

⑲ 子どもたちの声に反応をして畝に近づき、実際に掘りながら「掘って、掘って」と言う。

手に土のついた子どもたちの中で、手に多くの土のついてる子どもの手首を掴み、「お手手パンパンして座って待っていて」、「ゴシゴシして待っていてね」と言う。(土を払うことの誘導)

⑳ 片方の手で子どもの手首を掴み、畑の方へ子どもを誘導しながら「4つ採ってない人は探しに行っていていいよ」と言う。(収穫数の少ない子どもへの指示)

㉑ イモの入ったバケツに歩いて近づき、バケツの方を見ながら「じゃあ、そろそろ数を数えようかな」と言いながら、バケツを持ち上げ、広い場所に移動をしながら「バケツにいっぱいになったおイモさんたちいくつあるかな」と言う。足元にいる子どもたちに視線を向け、子どもたちが座る場所を確保しながら、畑にいる子どもたちに呼びかけるように「○○ちゃん、△△ちゃん、おイモ数えるよ」と言う。

「みなさん、もうおしまい。手をパンパンして、数数えましょう。じゃあ座ってください。まず先生数えます。いきますよ、せいの」と言う。(数を数えることへの誘導)

㉒ 子どもたちが円形に座ることができるよう、幼稚園教諭を起点に指で円を書くよう動かし「大きく、まあるくなってくれる?」と言う。後ろにさがってほしい子どもの腕を掴みながら誘導するように「バックオーライ」と言う。(隊形の指導)

② 「はい座って」イモを見ようとバケツに近づいてきた子どもたちを少し遠ざけるように手を伸ばして子どもが座る場所を具体的に指示するように指を指して「もうちょっと後ろに座って、○○ちゃん、△△ちゃんのお隣お願いします。」と言う。

子どもたちの名前を呼びながら、子ども達が座る場所を指差しながら指示をしていく。子ども達が幼稚園教諭の周りに円を作って座っている。(隊形の修正指導)

④ バケツの中からイモを取り出し、子どもたちに見えるようにする。子ども達が数えるのを促すように子どもたちと一緒に数える。「いち、にい～」と言う。子ども達が数え始めたので、幼稚園教諭は数えるのをやめる。(子どもたちの数え方に任せる)

⑤ 「早い早い。これまだ、はちだよ」八個目のイモを子どもの目の高さに上げたまま、イモに注目させるように揺らす「これ、はちだよ」と言う。

片手にイモを持ち、片手で子どもたちのカウントを制止するように手を左右に振りながら「ちょっとみんな早い、じゅうろくの次」と言う。イモを一つ手に取り子どもたちに見せるようにしてカウントの続きを促すように笑顔を向ける。子ども達が幼稚園教諭の手の動きに連動するようにカウントを行ったため声をかける「そうそうそう」と言う。

再び子どもたちのカウントが先行しそうになったため大きめの声を出して、幼稚園教諭の手の動きと子どもたちのカウントが連動するような言い方で「じゅうく」と言う。子どものカウントが早くなっていくため幼稚園教諭が声を出してイモを数える。

子どもたちに注意をするわけではないが、子どもたちに促すように数える。(数える早さの修正指導)

以上のことから、畝をやわらかくする説明からはじまり、準備や入れ物の指示、茎の引き抜きの指導、ジャガイモへの着眼と収穫の誘導・開始の指示、子どもの活動の確認と誘導、全員参加の確

認、洗うことの指示、取り残し有無の確認、消極的・躊躇している子どもの確認と誘導、土を払うことの誘導、収穫数の少ない子どもへの指示、数を数えることへの誘導と、活動場面ごとに丁寧に援助していることが分かった。

中でも具体的な援助が多かったのは、「収穫の誘導」と「消極的・躊躇している子どもの確認と誘導」、「数を数えることへの誘導」であった。

「子どもへの協同・励まし」には次の援助があった。

① 引き抜いたイモの茎を持っている子どもの後に立ち、子どもを抱きしめるように片方の肩に手を置き、もう片方の手で子どもの手首あたりを掴み、徐々に腕を上にあげながら、茎についたイモをみんなに見せるようにする。

しゃがんでいる子どもを見ながら、その場にしゃがみ、子どもがひっぱっていた茎と一緒にひっぱる。

イモ掘りをしている子どもに近づき子どもの後ろにしゃがみながら、イモのありかを指さして伝え、子どもと一緒にイモを掘る(子どもと一緒に行動)

② 子どもを軽く前へ押し、他の子どもの頭を軽く触れながら、イモ掘りへと誘導する。2人の子どもの後ろに立ち、子どもたちが引き抜こうとしているイモの茎を見ながら「せいで、よいしょ、ついていた。」と言う。

子どもたちを見たまま後ろに数歩さがり、さがった場所で、子どもたちに視線を向けながら「せいのうで」「よいしょ。ひっぱれ、ひっぱれ、ひっぱれ、ひっぱれ」と言う。(励ましの言葉がけ)

③ 「おイモが無かったら悲しい、いっぱい水あげてくれたのに。」と言う。

子どもたちの間にしゃがみこんで掘る。子どもの呼びかけを受け止めるように「あった。」と言う。

子どもが見せている小さいイモを見ながら「かわいいね、ちっちゃいね、赤ちゃんあったね。」と言う。子どもが差し出していたイモを見て「あ、大きい、大きい。」と言う。(言葉での表現)

以上のことから、「子どもへの協同・励まし」には「子どもと一緒にの行動」と「励ましの言葉がけ」、「言葉での表現」の3つの具体的な援助があった。

「楽しさへの誘導」には次の援助があった。

- ① 「はい。じゃあ、手で使って、イモ掘り〈節をつけながら〉どうぞ。」

イモに注意を向けるように「なんかみえた、なんかみえた。」(期待感を持たせる)

- ② 子どもが掘ったイモと子どもを見ながら「すごい。でかいね。」、「すごい。わー、すごい。」、「やったね。」、「イモ掘り名人だね。」、「〇〇ちゃん、ヤッター。」〈リズムや調子をつけ、拍手をしながら〉と言う。(楽しさと達成感を持たせる)

以上のことから、「楽しさへの誘導」には「期待感を持たせる」と「楽しさと達成感を持たせる」の2つの具体的な援助があった。

IV. まとめ

幼稚園における栽培活動での課題の一つとして「水やり」と「雑草抜き」の労力と時間確保の大変さ⁴⁾があった。本研究の幼稚園教諭へのインタビューではこの2つの作業を子どもたちに体験させたい思いが分かった。その目的は「野菜の生育過程を体験させること」の重視である。子どもが野菜の成長過程を単に見つめるだけでなく「お世話をする大変さ」として体験することで、収穫への意欲と食べる楽しさにつながることを、幼稚園教諭が意識していたことが分かった。

栽培活動の収穫にいたるまでには畑を耕すことから始まり、苗・種の購入、植え付け、水やり、雑草抜き、間引きなどの作業がある。幼稚園で子どものできる作業すべてを実践することは難しい。栽培活動は保育の一環であるため、子どもの時間と作業に限界がある。本研究対象の幼稚園教諭は「苗・種の植え付け」をはじめ、野菜の生育中に何度も繰り返される「水やり」と「雑草とり」を子どもが積極的に行うことを望んでいる。そこには「子どもが同じことをがんばって継続するこ

と」で「作物が育つ過程を体験的に知ること」を重要視していることが分かった。さらに「他の子どもへのおもいやり」が育つ環境としてもとらえている。

収穫の援助では「収穫の誘導」と「消極的・躊躇している子どもの確認と誘導」、「数を数えることへの誘導」などを丁寧に何度も援助していた。さらに、『ジャガイモ、おはようって出たら〜。』や『手が真っ黒になるまで掘って。』など子どもにとって具体的で分かりやすい表現で指導していた。多くの子どもはジャガイモ掘りの経験は少ないと思われる。中でも3歳児にとって幼稚園でのイモ掘りは初めての経験であり、どのようにしたらよいのか分からないと思われる。そのため、幼稚園教諭が3～5歳児全員の子どもがジャガイモを掘ることができることを重視し、収穫の方法を丁寧に指導していたことが推察される。

また、ジャガイモの数を数える場面では子どもたちが単に数を唱えることを制止して、物と数の一致を重視していた。このことは、数の概念を子どもに伝えていたことが分かる。

「子どもへの協同・励まし」には『子どもがひっぱっていた茎を一緒にひっぱる』などの子どもと一緒にの行動や『よいしょ、ひっぱれ、ひっぱれと言う』などの「励ましの言葉がけ」を行い、『ちっちゃいね、赤ちゃんあったね』などの「言葉での表現」の具体的な援助を行い、さらにはリズムや調子をつけ、拍手をしながらの言動での「楽しさへの誘導」を行っていた。幼稚園教諭は子ども全員に「できた」という喜びと楽しさを感じることができるようになっているのである。その喜びと楽しさは達成感につながるものである。

本研究での幼稚園教諭へのインタビューとジャガイモ掘りの活動から得られたことは、収穫の目的が「達成感を感じさせる」と推察された。

この達成感によって、子ども自身は栽培した野菜を食べる楽しさをより多く感じることができ、幼児期の栽培・収穫の目的は子どもの経験の多少にかかわらず、子ども自身が喜びを感じ、食

べる楽しさにつながるようにすることである。収穫における幼稚園教諭の援助の実際から、栽培活動の目的が「達成感を持たせる」から「栽培した野菜を食べる楽しさにつなげること」であることが分かった。

文 献

- 1) 外山紀子, 野村明洋: 保育園の作物栽培実践に基づく食物の生産過程に関する学び, 日本食育学会誌, 4 (2): 103-110, 2010.
- 2) 木田春代, 武田文, 荒川義人, 大久保岩男: 幼稚園における野菜栽培活動の状況とその食育効果—北海道某市での調査—, 天使大学紀要13 (2): 1-11, 2012.
- 3) 古郡曜子, 山口宗兼: 幼稚園における食育カリキュラム試作に関する基礎的研究—幼稚園教諭へのインタビュー調査を通して—, 北海道文教大学研究紀要36: 23-34, 2012.
- 4) 古郡曜子, 小田進一: 食育としての栽培活動における課題—幼稚園教諭へのインタビューから—, 北海道文教大学研究紀要37: 131-137, 2013.
- 5) 古郡曜子, 杉村留美子: 幼児の食育にボランティアを取り入れた栽培活動—恵庭(えにわ)幼稚園の事例から—, 北海道文教大学研究紀要38: 125-131, 2014.
- 6) 鯨岡峻著: エピソード記述入門 実践と質的研究のために, 東京大学出版会, 2005.
- 7) 柴山真琴: 子どもエスノグラフィー入門 技法の基礎から活用まで, 新曜社, 2006.

